

台川

宮沢賢治

青空文庫

「もうでかけましょう。」たしかに光がうごいてみんな立ちあがる。腰こしをおろしたみじかい草。かげろうか何かゆれている。かげろうじゃない。網膜もうまくが感じただけのその光だ。

「さあでかけましょう。行きたい人だけ。」まだ来ないものは仕方かたない。さつきからもう二十分も待まつたんだ。もつともこのみちばたの青いいろの寄宿舎きしゆくしゃはゆっくりして爽さわやかでよかったが。これからまたここへ一いっぺん遍帰いつぺんつて十一時には向むこうの宿やどへつかなければいけないんだ。「何処どこさ行ぐのす。」そうだ、釜淵かまぶちまで行くとこのの知らないものもあるんだな。「釜淵かまぶちまで、一寸ちよつと十分じふぶんばかり。」

おとなしい新らしい白、緑みどりの中だから、そして外光の中だから大へんいいんだ。天竺木綿てんじくもめん、その菓子かしの包みつつは置いて行つてもいい。雑囊ざつのおうや何かもこの芝しばへおろしておいていい行かないものもあるだろうから。

「私はここで待つてますから。」校長だ。校長は肥ふとつてまつ黒にいで立ちたしかにゆつくりみちばたの草、林の前に足を開ひらいて投げ出している。

「はあ、では一寸行つて参まいります。」木の青、木の青、空の雲は今日も甘酸あまずつぱく、足なみのゆれと光なみの波。足なみのゆれと光の波。

粘土ねんどのみちだ。乾かわいている。黄色だ。みち。粘土。

小松と林。林の明暗いろいろの緑。それに生徒はみんな新鮮だ。

そしてそうだ、向うの崖の黒いのはあれだ、明らかにあの黒曜石の dyke だ。ここからこんなにはつきり見えるとは思わなかつたぞ。

よしうまい。

「向うの崖をごろんなさい。黒くて少し浮き出した柱のような岩があるでしょう。あれは水成岩の割れ目に押し込んで来た火山岩です。黒曜石です。」ダイクと云おうかな。いいや岩脈がいい。「ああいうのを岩脈といいます。」わかったかな。

「わかりましたか。向うの崖に黒い岩が縦に突き出ているでしょ

う。

あれは水成岩のなかにふき出した火成岩ですよ。岩脈ですよ。あれは。」

ゆれてるゆれてる。光の網。あみ

「この山は流紋凝灰岩りゅうもんぎょうかいがんでできています。石英粗面岩せきえいそめんがんの凝

灰岩、大へん地味ちみが悪いのです。赤松あかまつとちいさな雑木ぞうきしか生え

ていないでしょう。ところがそのへん、麓ふもとの緩い傾斜けいしゃのところ

には青い立派りっぱな闊葉樹かつようじゆが一杯いっぱい生えているでしょう。あすこは

古い沖積扇ちゅうせきせんです。運ばれてきたのです。割合わりあい肥沃ひよくな土壌どじよう

を作っています。木の生え工合ぐあいがちがって見えましよう。わかり

ましよう。」わかるだろうさ。けれどもみんな黙だまって歩いている。

これがいつでもこうなんだ。さびしいんだ。けれども何でもないんだ。

後ろで誰かこごんで石ころを拾っているものもある。小松ばやしだ。混んでいる。このみちはずうつと上流まで通っているんだ。造林のときは苗や何かを一杯つけた馬がぞろぞろここを行くんだぞ。

「志戸平のちかく豊沢川の南の方に杉のよくついた綺麗な山があるでしょう。あすことこことはとても木の生え合や較べにも何にもならないでしょう。向うは安山岩の集塊岩、こつちは流紋凝灰岩です。石灰や加里や植物養料がずうつと少いのです。ここにはとても杉なんか育たないのです。」うしろ

でふんふんうなずいていのは藤原清作だ。あいつは太田だからよくわかつているのだ。

「尤も向うの杉のついているところは北側でこっちは南と東です。その関係もあります。がそうでなくてもこっちは北側でも杉やひのきは生えませんが。あすこの崖で見てもわかります。この山と地質は同じです。ただ北側なため雑木が少しはよく育つてます。」「いいや駄目だ。おしまいのことを云つたのは結局混雑させただけだ。云わないでおけばよかつた。それでもあの崖はほんとうの嫩い緑や、灰いろの芽や、樺の木の青やずいぶん立派だ。佐藤箴がとなりに並んで歩いてるな。桜羽場がまた凝灰岩を拾つたな。頬がまっ赤で髪も赭いその小さな子供。」

雲がきれて陽ひが照てるしもう雨はだいじょうぶ大丈夫だ。さつきもいっぺん一遍云つたのだがもう一度いちどあの禿はげの所ところの平ひらべつたい松まつを説明せつめいしようかな。平ひらつたくて黒くろい。影かげも落おちている。どこかであんなコロタイプを見た。及おいかわ川かわやなんか知しつてゐるんだ。よすかな。いいや。やろう。「さあ、いいですか。あすこに大きな黄色はの禿はげがあるでしょう。あすこの割わり合あい上のあつりに松が一本生せいえてましよう。平ひらつたくてまるで潰つぶれた蕈きのこのようです。どうしてあんなになつたんですか。土どじょう壤あさが浅あくて少すくし根ねをのぼすとすぐ岩石いしでしょう。下したへ延のびようとして出来できないでしょう。横よこに広ひろがるだけでしょう。ところところが根ねと枝えだは相そう関かん現げん象しょうで似にたよような形かたちになるんです。枝えだも根ねのよように横よこにひろがります。桜さくらの木きなんか植うえるとき根ねを束たばねるよ

うにしてまつすぐになげ植えると土から上の方も筈ほうぎのように立ちましよう。広げれば広がります。」

「そんだ。林学でおなら習った。」何と云いったかな。このせいの高めい眼めの大きな生徒せいと。」

坂さかになつたな。ごろごろ石が落おちている。

「先生この石何て云うのです。」どうせきまつてる。

「凝灰岩。流りゅうもん紋もん凝灰岩だ。凝灰岩の温おんせん泉せんの為ために硅けい化かを受うけたのだ。」

光あみが網あみになつてゆらゆらする。みんなの足あし並なみ。小松の密みつ林りん。

「釜淵かまぶちだら俺おらあ前まへになんぼがえりも見だ。それでも今日も来た

。」

うしろで云っている。あの顔の赤い、そしていつでも少し眼が血走つてどうかすると泣ないているように見える、あの生徒せいとだ。五ご内川かわでもないし、何と云つたかな。

けれどもその語ことばはよく分つてゐるぞ。よくわかつてゐるとも。

巨礫きよれきがごろごろしている。一つ欠かいて見せるかな。うまくいった。パチンといった。「これは安山岩あんざんがんです。上流かみの方なたから流ながれてきたのです。」

すつと歩き出せ。関せきさんだ。「この石は安山岩であります。上流から流れてきたのです。」まねをしている。堀田ほっただな。堀田は赤い毛糸のジャケットきを着きているんだ。物ものを言う口付くちつきが覚束おぼつかなくて眼めはどこを見ているかはつきりしないで黒くてうるんでいる。

今はそれがうしろの横よこでちらつと光る。

その松まつばやし林はやしの中から黒い畑はたけが一枚まい出てきます。

(ああ畑も入ります入ります。遊園地ゆうえんちには畑もちやんと入りま

す) なんて誰だれだったかな、云いつていた、あてにならない。こんな

畑を云うんだらう。おれのはもつとずっと上流きたかみの北上川きたがみから遠

くの東の山地まで見はらせるようにあの小桜山こざくらの下の新らしく

墾ひらいた広い畑を云ったんだ。

「全ぜんたい体たいどごさ行くのだべ。」

「なあに先生せんせいさ従ついでさいい行げばいいんだじゃ。」また堀田ほりただな。

前の通りだ。うしろで黄いろに光っている。みんな躊躇ちゆうちよ躊躇ちよして

みちをあけた。おれが一番さきになる。こつちもみちはよく知ら

ないがなあにすぐそこなんだ。路みちから見えたら下りるだけだ。防ぼ火うかせん線せんもずうつとうしろになった。

「あれが小桜山だろう。」けわしい二つの稜りょうを持もち、暗くらくて雲かげにいます。少し名前に合わない。けれどもどこかしんとして春の底そこの樺かばの木の気分はあるけれどもそれは偶然ぐうぜん性せいだ。よくわからない。みちが二つに岐わかれている。この下のみちがきつと釜淵かまぶちに行くんだ。もうきつと間違まちがいない。

小松こまつだ。密みつだ。混こんでいる。それから巨礫きよれきがごろごろしている。うすぐろくて安山岩だ。地質ちしつちようさ調査をするときはこんなどこから来たかわからないあいまいな岩石ものに鉄槌かなづちを加えてはいけないと教えようかな。すぐ眼めの前まへを及川おいかわが手拭てぬぐいを首くびに巻まいて黄色の

服ふくで急いそいでいるし、云いおうかな。けれどもこれは必ひつ要ようがない。却かえつて混こん雑ざつするだけだ。とにかくひどく坂さかになった。こんな工ぐ合あいで丁ちよう度どよく釜かま淵ぶちに下りるんだ。遠とほくで鳥も鳴ないでいるし。下したの方たにで溪たにがひどく鳴なっている。ことによるとここらの下したが釜かま淵ぶちだ。一ちよつと寸すんのぞいてみよう。

黒くろい松まつの幹みきとかれくさ。みんなぞろぞろ従ついてくる。溪たにが見みえる。水みづが見みえる。波なみや白しろい泡あわも見みえる。ああまだ下しただ。ずうつと下しただ。釜かま淵ぶちは。ふちの上うへの滝たきへ平たいらになつて水みづがするする急いそいで行く。それさえずうつと下したなのだ。

この崖がけは急いそでも下りられない。下に降おりよう。松林だ。みちらしく踏ふまれたところもある。下りて行いこう。藪やぶだ。日陰ひかげだ。山やま

まぶき
吹おうちの青いえだや何かもじやもじやしている。さきに行くのは大
内だ。大内は夏服の上に黄色な実習服じっしゅうふくを着て結びむすを腰こしにさ
げてずんずん藪をこいで行く。よくこいで行く。
急にけわしい段だんがある。木につかまれ木は光る。雑木ぞうきは二本雑木
が光る。

「じゃ木さば保たご附つくこなしだじやい。」誰だれかがうしろで叫さけんで
いる。どういう意味いみかな。木にとりつくと弾はね返かえつてうしろのも
のを叩たたくというのだろうか。

光つて木がはねかえる。おれはそんなことをしたかな。いやそれ
はもうよく気をつけたんだ。藪だ。もじやもじやしている。大内
はよくあるく。

崖だ。滝はすぐそこだし、ここを下りるより仕方ない。さあ降りよう。大内はよく降りて行く。急だぞ。この木は少し太すぎる。灰いろだ。急だぞ、草、この木は細いぞ、青いぞあぶないぞ。なかなか急だ。大丈夫だ。この木は切つてあるぞ。「ほう、」そこはあんまり急だ。

おりるのか。仕方ない。木がめまぐるしいぞ。「一人落ちればみんな落ちるぞ。」誰かうしろで叫んでいる。落ちてきたら全くみんな落ちる。大内がずうつと落ちた。

河原まで行ってやつととまった。

おれはとにかく首尾よく降りた。

少し下へさがり過ぎた。瀑たきまで行くみちはない。

凝ぎようかいがん灰岩が青じろく崖なみと波との間に四、五寸すんちゆづ続いてはいるけれどもとてもあすこは伝つたつて行けない。それよりはやっぱり水を渉わたつて向むこうへ行くんだ。向うの河原は可成かなり広いし滝たきまでずうつと続いている。

けれども脚あしはやっぱりぬれる。折せつかく角ぬらさないためにまわり道して上から来たのだ、飛とびいし石を一つこさえてやるかな。二つはそのまま使つかえるしもう四つだけころがせばいい、まずおれは靴くつをぬごう。ゴム靴によごれた青の靴下か。「一寸ちよつと待つて、今渡わたるようにしますから。」

この石は動うごかせるかな。流紋岩りゆうもんがんだかなりの比ひじゆう重だ。動くだ

ろう。水の中だし、アルキメデス、水の中だし、動く動く。うま
くいった。波、なみこれも大丈夫だ。だいじょうぶ大丈夫。引率いんそつの教師が飛石
をつくるのもおかしいがまたえらい。やっぱりおかしい。ありが
たい。うまくいった。

ひとりが渡る。ぐらぐらする。あぶなく渡る、二人がわたる。

もう一つはどれにするかな　もう四人だけ渡っている。飛石の上
に両りょうあしを揃そろえてきちんと立って四人つづいて待まっているのは面おも
もしろ白い。向うの河原のを動かそう。影かげのある石だ。

持もてるかな。持てる。けれども一いちばん番波の強いところだ。恐おそらく
少し小さいぞ。小さい。波が昆布こんぶだ、越こして行く。もう一つ持っ
て来よう。こいつは苔こけでぬるぬるしている。これで二つだ。まだ

ぐらぐらだ。も一つ要る。小さいけれども台にはなる。大丈夫だ。おれははだしで行こうかな。いいややっぱり靴ははこう。面倒くさい靴下はポケットへ押し込め、ポケットがふくれて気持ちがいいぞ。

素あしにゴム靴でぴちやぴちや水をわたる。これはよつぽどいいことになつてゐる。前にも一ぺんどこかでこんなことがあつた。

去年の秋だ。腐植質の野原のたまり水だったかもしれない。

向うに黒いみちがある。崖の茂みにはいつて行く。これが羽山を越えて台に出るのかもわからない。帰りに登るとしようかな。いや。だめだ。曖昧だしそれにみんなも越えれまい。

「先生、この石何す。」一かけひろつて持つてゐる。「ふん。何

だと思えます。」「何だべな。」「凝灰岩ぎようかいがんです。ここらのみんなそうですよ。浮岩ふがん質の凝灰岩。」

みんなさつきはあしをぬらすまいとしたんだが日が照てるし水はきれいだし自分でも気がつかず川にはいったんだ。

もうずんずん瀑たきをのぼって行く。cascadeだ。こんな広い平たいらな

明るい瀑はありがたい。上へ行ったらもつと平らで明るいだろう。

けれども壺つぼ穴あなの標ひょう本ほんを見せるつもりだったが思ったくらい

はつきりはしていないな。多少失望しつぼうだ。岩は何という円くなめ

らかに削けずられたもんだろう。水苔みずこけも生はえている。滑すべるだろうか。

滑らない。ゴム靴くつの底そこのざりざりの摩擦まさつがはつきり知れる。滑ら

ない。大丈夫だいじょうぶだ。さらさら水が落おちている。靴はビチャビチャ

云っている。みんないい。それにみんなは後からついて来る。

苔がきれいにはえている。実に円く柔らかかに水がこの瀑のところを削ったもんだ。この浸蝕の柔らかさ。

もう平らだ。そうだ。いつかもここを溯って行った。いいや、此処じゃない。けれどもずいぶんよく似ているぞ。川の広さも両岸の崖、ところどころの洲の青草。もう平らだ。みんな大分溯ったな。

「ここをごらんなさい。岩石の裂け目に沿って赤く色が変わっているでしょう。裂け目のないところにも赤い条の通っているところがあるでしょう。この裂け目を温泉が通ったのです。温泉の作

用で岩が赤くなつたのです。ここがずうつとつちの底そこだつたとき
ですよ。わかりますか。」

だまつている。波なみがうごき波が足をたたく。日光が降ふる。この水
を渉わたることの快こころよさ。菅木すがきがいるな。いつものようにじつとひとの
目を見つめてゐる。

「ここをごらんなさい。岩に裂さけ目があるでしょう。ここを温おんせ
泉んが通つて岩を變へん質しつさせたのです。風化ふうかのためにもこう云いう
赤しい縞しまはできません。けれどもここではほかのことから温泉の作用
ということがわかるのです。」

ずいぶん上流じょうりゅうまで行つた。実際じつさいこんな川床かわどこが平たいらで水
もきれいだし山の中の第一流だいいちりゅうの道路どうろだ。どこまでものぼりた

いのはあたりまえだ。

向うむこの岸きしの方かたにうつろう。

「先生この岩何す。」千葉ちばだな。お父さんによく似にている。「何

に似てます。何でできてますか。」だまっています。「わかりませ

んか。礫れき岩がんです。礫岩れきがんです。凝灰質ぎようかいしつ礫岩れきがん。」及川おいかわだな。

「いいですか。これは温泉おんせんの作用ですよ。この裂け目を通つた

温泉のために凝灰岩が変質へんしつを受けたんです。」

みんなわかるんだな。これは。向うにも一つ滝たきがあるらしい。う

すぐろい岩の。みんなそこまで行こうと云うのか。草原があつて

春木も積つんである。ずいぶん溯のぼつたぞ。ここは小さな段だんだ。

「ああ云う岩のすき間のごと何て云うのだたべな。習ならつたたと

も。」

「やっぱり裂け目です。裂け目でいいんです。」習ったというのは節理せつりだな。節理なら多面節理ためん、これを節理と云うわけにはいかない。裂罅れっかだ。やっぱり裂け目でいいんだ。壺穴つぼあなのいいのがなくて困こまるな。少し細長いけれどもこれで説明せつめいしようか。elongat edpot-hole (イ)がどうしてこう掘ほれるかわかりますか。石ころ、礫れきがこれを掘るのです。そら水のために礫れきがごろごろするでしょう。だんだん岩を掘るでしょう。深いふかところが一層いっそう深くなるはずです。もつと大きなものもあります。」

日光の波、日光の波、光の網あみと、水の網。

「ほこの穴あなこまん円けじや。先生。」

ああいい、これはいい標本だ。こいつなら持つてこいだ。

「さあ、見て下さい。これはいい標本です。そら。この中に石ころが入ってましよう。みんな円くなってるでしよう。水ががりがり擦ったんです。そら。」

実にいい礫だ。まっ白だ。まん円だ水でぬれている。取ってしまった。誰かがまた掻き廻す。もうない。あとは茶色だし少し角もある。ああいいな。こんなありがたい。あんまり溯る。もう帰ろう。校長もあの路の岐れ目で待つている。

「ほう。戻れ。ほう。」向うの崖は明るいし声はよく出ない。聞えないようだ。市野川やぐんぐんのぼって行く。「ほう、」

「戻れど。お。」「戻れ。」

向いた向いた。一人向けばもういい。川を戻るよりはここからさ
 つきの道へのぼったほうがいい、傾斜けいしゃもゆるく丁度ちやうどのぼれそ
 うだ。「みんなそこからあの道へ出る。」

手を振ふったほうがわかるな。わかつたわかつたわかつたようだ。

市野川が崖の上のみちを見ている。

うしろの滝たきの上で誰だれか叫さけんでいる。大竹おおたけだ。「おら荷物にもつ置いて

きたがらこつちがら行く。」よかろう。「よおし。」もう大竹が

滝をおりて行く。すばやいやつだ。二、三人またついて行く。そ

れからも一人おくれてひどく心配しんぱいそうに背中せなかをかがめて下りて

いく。斉藤さいとう貞てい一いちかな。一寸ちよつとこつちを見たところには栗鼠りすの

軽かるさもある。ほんとうに心配なんだ。かあいそう。

市野川やみんながぞろぞろ崖をみちの方へ上って行くらしい。

そうすればおれはやっぱり川を下ったほうがいいんだ。もしも誰

か途とちゆう中で止つてはわるい。尤も靴もつと下もポケットに入つて

いるしかなら必ず下らなければならぬということはない、けれどもや

っぱりこつちを行こう。ああいい気持だ。鉄かなづち槌をこんなに大き

く振つて川をあるくことはもう何年ぶりだろう。波なみが足をあら

水はつめたく陽ひは射さしている。

「先生あ、ずいぶん足あ早いな。」富手とみてかな、菅木すがきかな、あんな

ことを云いっている。足が早いというのは道みちをあるくときの話だ。

ここも平たいらで上じやうとう等の歩道ほどうなのだ。ただ水があるばかり。

「先生、あの崖がけのどご色か変かわつてるのあ何してす。」簡かんだ。崖の色

か。

「あれは向うだけは土が落ちたんです。滑つて。」
 うん。あるある。これが裂罅を温泉の通つた証拠だ。玻璃
 蛋白石の脈だ。

「ここをごらん下さい。岩のさけ目に白いものがつまっているで
 しょう。これは温泉から沈澱したのです。石英です。岩のさ
 け目を白いものが埋めているでしょう。いい標本です。」
 んなが囲む。水の中だ。

「取らえないがべが。」「いいや、此処このまんまの標本だ。」
 「それでも取らえないがべが。」「取つてみますか。取れます。」
 中々面倒だ。

「先生こつちにもつと大きなのあるんす。」あるある。これなら
 ネストと云つてもいい。これなら取れる。ハムマアの尖つた方とが
 はだめだ。平たい方は……。

水がびちやびちやはねる。そつちの方のものが逃げる、ふん。

「水がはねますか。やつぱりこつちでやるかな。」

白く岩に傷がついた。一一所ふたところついた。

とれる。とれた。うまい。新鮮だ。青白い。

緑簾石もついている。そうじやないこれは苔だ。こけ「いいです
りよくれんせき

か。これは玻璃蛋白石です。温泉から沈澱したのです。晶洞しょうどう

もあります。小さな石英の結晶けつしょうです。持もつておいでなさい。」

誰だ崖だれがけの上で叫さけんでいるのは。

「先生。おら河童捕りしたもや。河童捕り。」ふじわらけんたろう藤原健太郎だ。黒の制服せいふくを着て雑囊ざつのおうをさげ、ひどくはしやいで笑わらっている。どうしていまごろあんな崖の上などに顔を出したのだ。

「先生。下りで行くべがな。先生。よし、下りで行くぞ。」

「うん。大丈夫だいじょうぶ。大丈夫だ。」おりるおりる。がりがりやつて来るんだな。ただそのおしまいの一足だけがあぶないぞ。はだか裸の青い岩だし急きゆうだ。

「おおい。もう少し斜ななめにおりろ。」おりるおりる。どんどん下りる。もう水へ入った。「どうしたのです。」「先生。河童捕りあんすた。ガバンも何も、すっかりぬらすたも。」「どこで。……」もう下ろう。滝たきに來た。下りているものもある。水の流ながれる所ところは

苔こけは青く流れない所はかつしよく褐色だ。みんなこわごわ下りて来る。
 水の流れる所は大丈夫滑すべらないんだ。「水の流れるところをある
 きなさい。水の流れるところがいいんです。」
 あれは葛くずまる丸川だ。足をさらわれて淵ふちに入ったのは。いいや葛丸
 川じゃない。空想くうそうのときの暗い谷だ。どつちでもいい。水がさ
 あさあ云いっている。「いいな。あそこの水の跳ね返かえる処よ。」
 うん、いい早池はやちねさん峯山の七折ななおりの滝たきだつてこんなの大きなだけだ
 ろう。

もうみんなおりる。おれもおりる。たった一人あとからやって来
 る人がある。こわそうだ。

「水の流れるところをあるくんです。水の流れる所を歩くんです

よ。
」
そうだ。

そうだ。

いい
気持きもちちだ。

青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

台川

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>